『古代アメリカ』 9, 2006 pp. 65-73

＜調査報告＞

サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号の再解釈

古手川博一
（メキシコ国立自治大学大学院博士課程）

1. はじめに

世界中の様々な文化の考古資料に表現された図像を用いた解釈が、現在までに蓄積されてきた。このような研究は、文字資料を残していない過去の文化における人々の思考や行動を推測したり、社会を復元する有効な方法の一つとして多くの研究者が分析を試みてきた。メソアメリカ古代文化研究でも、文字の解読が進んだ文化や様々な民族誌との比較が可能な分野では大きな成果をあげている。しかし、図像を用いた研究は様々な学問分野の成果を統合して論証することは可能であるが、考古学的にそのような仮説を実証することが非常に難しい。さらに、そこに表現された図像が過去の人々によって具体的に何が描写されたものなのかを、考古遺物のみから推測することは決して簡単なことではない。

それにもかかわらず、文字資料や比較可能な民族誌のような補足情報が乏しいオルメカ文化に関しても図像を用いた研究は盛んである（Joralemon 1971, Taube 2004 など）。さらに、オルメカ文化の代表的な遺物であり、図像研究においても頻繁に分析対象となる大型の記念碑的な石彫は、その多くが考古学的なコンテクストを欠いているという問題も抱えている。そこで本論では特に、メキシコ湾沿岸地域の先古典期前期後葉（1200-900B.C.）に繁栄したオルメカ文化の大遺跡の一つ、サン・ロレンソ遺跡から出土した石彫 41 号を具体例として扱い、新たな解釈を提示することを試みる。今回の報告はメキシコ合衆国の Consejo Nacional de Ciencias y Tecnología（CONACYT）の奨学金を得て、2006 年２月から５月までに Museo Comunitario San Lorenzo Tenochtitlán 滞在中に得た知見をもとにしたものである。

2. サン・ロレンソ遺跡の概要

メキシコ合衆国ベラクルス州南部とそこに隣接するタバスコ州西部のメキシコ湾沿岸地域では、先古典期（1500B.C.−100A.D.）のオルメカ文化を特徴付ける大型の記念碑的な石彫が 30 遺跡以上から見つかっている(González Lauck 2000)。それらの石彫の総数は、これまでに公開されているものだけで 300 基以上に達する[1)]。そして、その殆どはサン・ロレンソ遺跡とラ・ベンタ遺跡から発見されている（図１）。現在までに、サン・ロレンソ遺跡からは 129 基の石彫が発見されており、周辺の遺跡を含めたサン・ロレンソ遺跡群全体としては 159 基になる（Cyphers 2004a）。

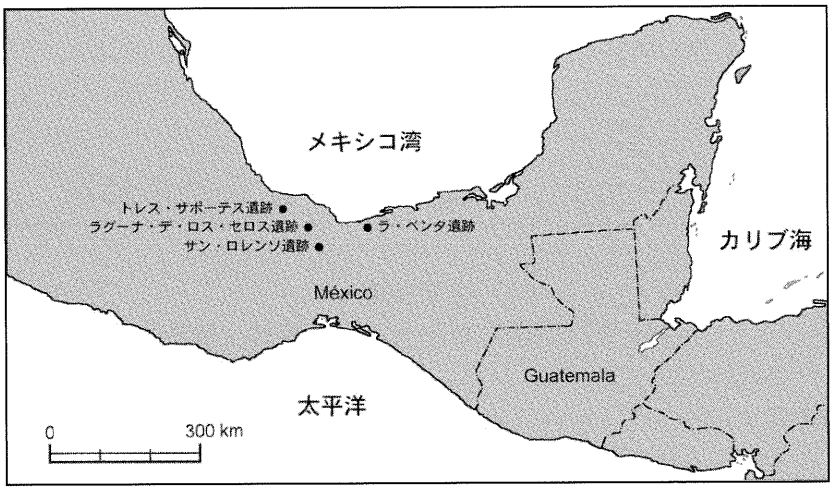

図 1. メキシコ湾沿岸地域のオルメカ文化の主要遺跡

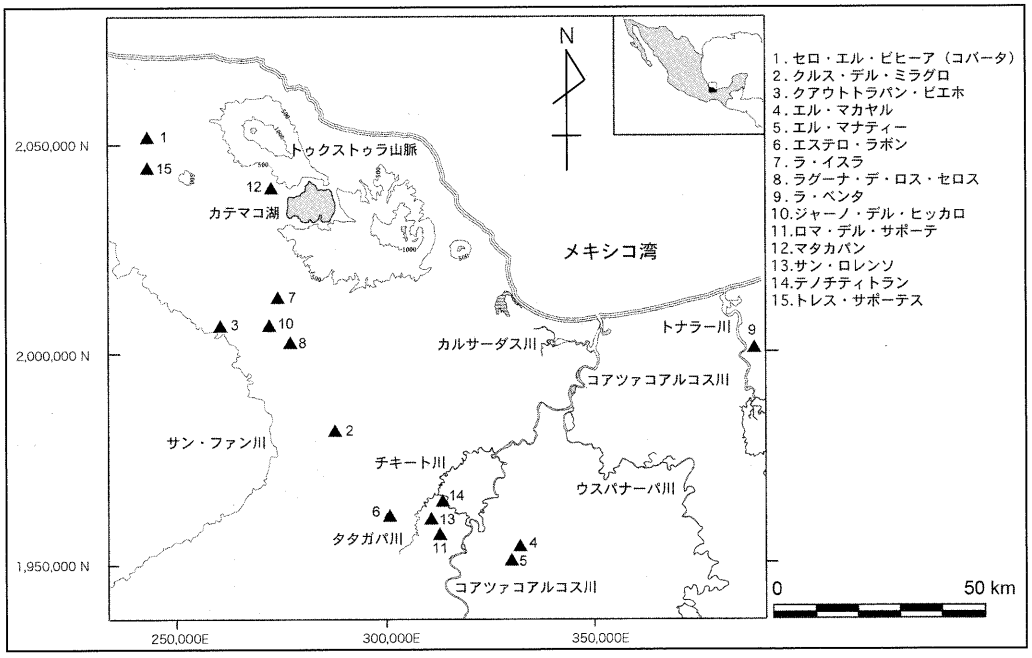

図 2. メキシコ湾沿岸地域のオルメカ文化遺跡と主要河川（Cyphers 2004a より作成）

サン・ロレンソ遺跡は、コアツァコアルコス川の支流タタガパ川とチキート川に囲まれた自然の丘を利用して、人為的に手を加えた広大な台地上に位置している（図２）。遺跡群としての遺物散布地はおよそ 690ha に達する（Symonds et al. 2002）。サン・ロレンソ遺跡では紀元前 1500 年頃から人類の居住の痕跡が見られるが、考古学的にオルメカ文化の要素が見られるようになるのは紀元前 1200 年頃からである。紀元前 900 年頃からは衰退の兆しが見られ、紀元前 700 年頃までは継

続して居住されたと考えられるが、その後は無遺物層が断続的に見られることから、人類の居住も断続的であったと考えられている[2)]（Coe and Diehl 1980 Vol.1）。

サン・ロレンソ遺跡やラ・ベンタ遺跡など大遺跡は、雨期に洪水を被る河川流域に立地する。このようなオルメカ文化においては、水の管理が非常に重要であった。また、水の管理と同様に石彫の原材料の管理も重要であったという仮説がこれまでの研究によって提出されている（Cyphers 1999）。そして、そのような管理体制のもとに製作された石彫自体の分配にも、管理規制が働いていた可能性も推測されている（Cyphers 2004b）。また、原材料の獲得や製作に費やされる膨大な労働力からも、オルメカ文化においてこれらの大型の石彫が社会的に重要な役割を果たしていたと考えられる。

図 3.　サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号

3. サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号（図 3）

サン・ロレンソ遺跡の石彫 41 号は、1967 年にマイケル・D・コウの指揮のもとで実施されたイェール大学による発掘調査で発見された。この石彫は、D グループと呼ばれる地域で他の 6 基の石彫とともに南北に軸をとる一直線上で出土した。出土層位はサン・ロレンソ層と名付けられた先古典期前期後葉と報告されている（Coe and Diehl 1980　Vol.1）。周辺からは他にも多数の石彫や原材料である玄武岩の破片が発見されており、この地点がサン・ロレンソ遺跡における石彫の製作あるいは再加工を行うための工房跡であると考えられている（Coe and Diehl 1980　Vol.1）。また、ここから約 100m ほど南では石製の配水溝で構成される東西に伸びる配水施設が検出されている（Coe and Diehl 1980　Vol.1）。さらに、配水施設の 50m ほど東側ではサン・ロレンソの支配者階層の人々が使用したと考えられる「赤の宮殿」と名付けられた建造物が検出されている（Cyphers 1994）。このように、この石彫はサン・ロレンソ遺跡内でも、機能的中心部から発見されたと言える。

サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号に表現されている人物は、L字形にデフォルメされた目とグロテスクな手の表現から超自然的な存在[3)]であると解釈されてきた（de la Fuente 1984: 95-96, Cyphers ed. 1997: 224, 2004a: 101-103）。さらに、口の形はU字形の小さな口として表現され、両頬に半月形のエクボの表現を伴う笑った表情として今日まで理解されてきた（de la Fuente 1973: 221-222, Coe y Diehl 1980　Vol.1: 351, Cyphers 2004a: 101-103）。

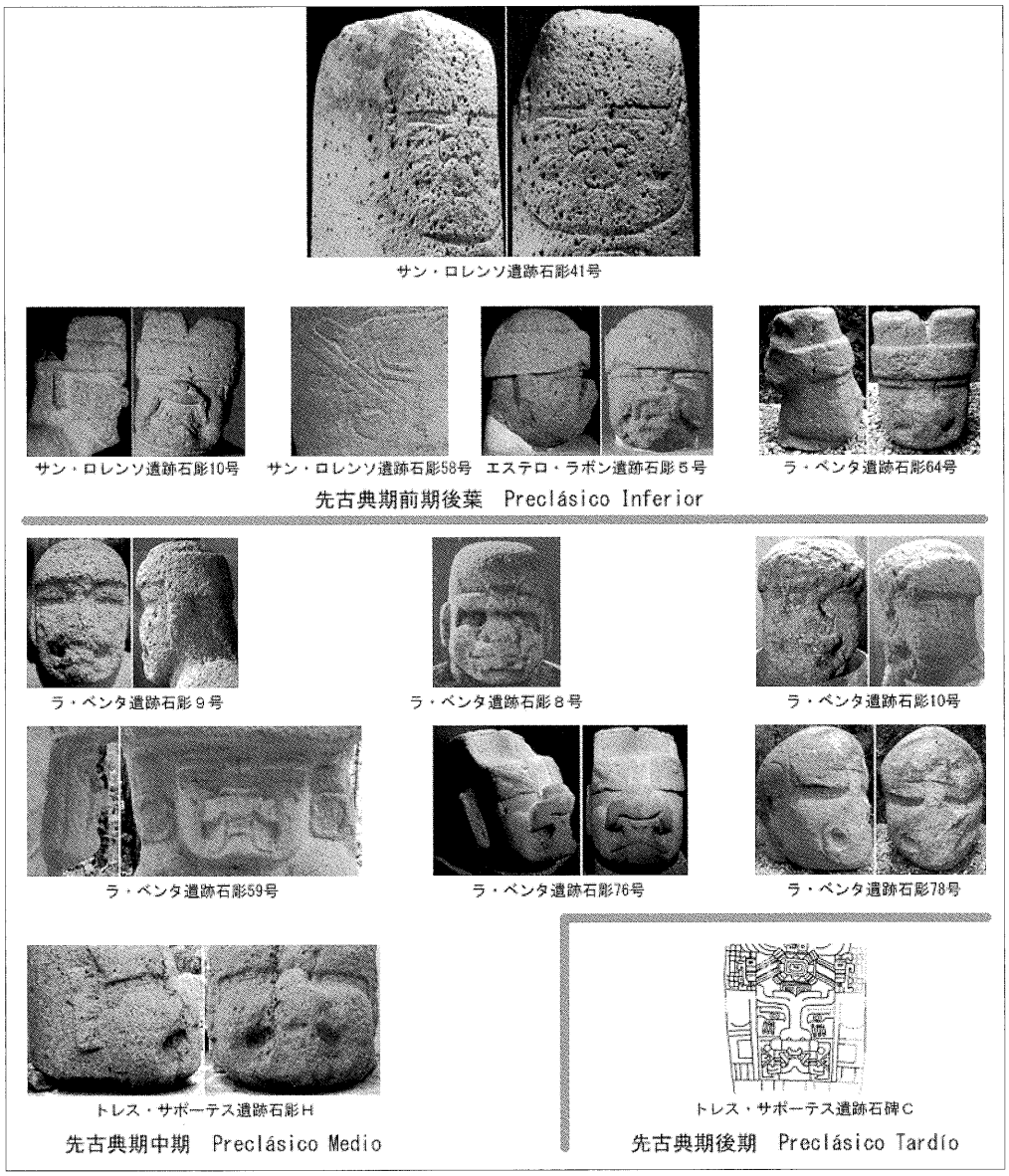

図 4. L 字形の目と超自然的存在の口が表現されたメキシコ湾沿岸地域先古典期の石彫（サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号：Cyphers 2004a、ラ・ベンタ遺跡石彫 8 号：De La Fuente 1973、トレス・サポーテス遺跡石碑 C：Porter 1992）

しかしメキシコ湾沿岸地域で、オルメカ文化に属すると考えられる膨大な数の大型石彫を見渡しても、このような形態の口の表現は皆無であるし、エクボの表現を見つけることもできない。さらに、サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号に表現されるＬ字形を呈する特殊な形態の目は、牙の表現を伴う口と常にセットになって表現されるという事実を指摘することができる[4)]（図４）。この牙の表現を伴う口は、超自然的な存在への変身を示すと考えられる。このような、オルメカ文化の石彫に関する一般的傾向を無視して、これまで考えられてきたような笑った口、あるいは笑った顔の表現として、サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号を解釈することは可能なのであろうか。たしかに、メキシコ湾沿岸地域のミシュテキージャ地域では、オルメカ文化より後の文化に属する笑った顔が表現された土偶が多数出土している（図５）。しかし、これらの土偶を遺した文化とオルメカ文化との間での直接的な関係はこれまでのところ判明していない。また、両者の笑った顔の表現を同一の芸術様式として認めることも困難である。

図 5. ミシュテキージャ地域の土偶

そこで、このサン・ロレンソ遺跡の石彫 41 号を詳細に肉眼観察した結果、現在までに報告されていない刻線が残っていることが判明した。オルメカ文化では大型の記念碑的な石彫が再彫刻、つまりリサイクルされて利用されることが頻繁に行われていた。オルメカ文化を特徴付ける巨石人頭像も、箱形の一枚岩から製作された玉座を再彫刻したものがあることが指摘されている（Porter 1989）。この石彫 41 号はサイファースも指摘しているように再彫刻、つまりリサイクルの途中にある（Cyphers 2004a: 101-103）。今回明らかになった刻線は顔の下部に見られるが、石彫自身がリサイクルされているために非常に微細な刻線となってしまっている（図６）。この微細な刻線の存在とＬ字形の目が描写されたその他の石彫との比較から、この石彫の顔の表現は超自然的な存在の口の表現が石彫のリサイクルによって、その全体像は失われてしまったものの、石彫の顔奥深くに刻まれ

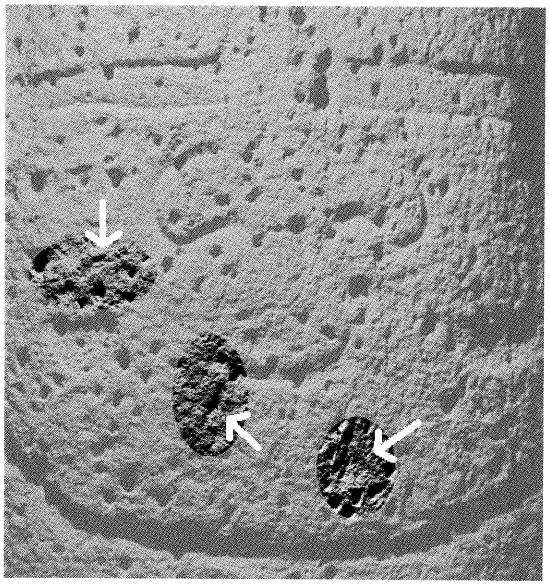

図 6. サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号に残る微細な刻線（Ann Cyphers 撮影）

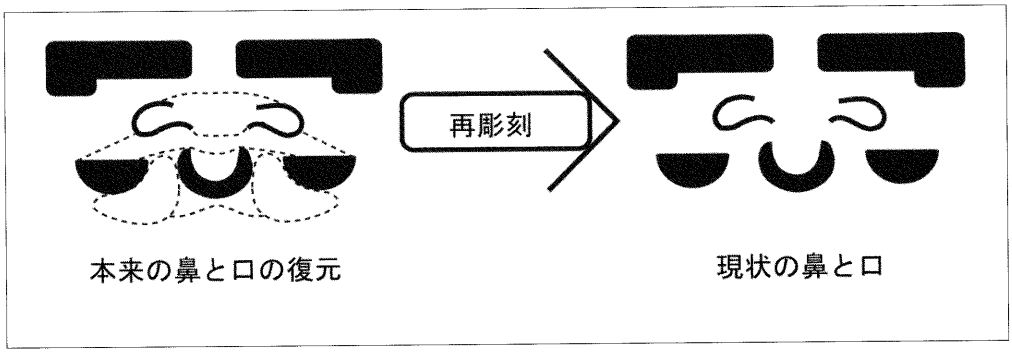

図 7. サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号の顔復元略図および現状の略図

た痕跡が残ったものと筆者は考えている（図７）。

つまり、両頬のエクボと考えられていた半月形のくぼみは、深く彫り込まれた口許の表現の痕跡と考えられる。そして、U 字形の口と考えられている部分も、超自然的存在の口の中央部に頻繁に描写される逆三角形の歯を表現するための彫刻の痕跡としてみなすことが可能である（図８）。従って、この石彫に表現されている顔は、超自然的な存在の口の表現が、石彫のリサイクルによって、今日見られるようなあたかも笑っているような顔となっていると考えられる。

図 8. 超自然的存在に典型的な口の形態（ラ・ベンタ遺跡石 76 号）

図 9. 巨石人頭像に表現される口の形態（サン・ロレンソ遺跡石彫 1 号）

一方また、サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号の鼻の形は、メキシコ湾沿岸地域のオルメカ文化の石彫全体を見渡してみても一般的ではない。しかし、上述のような新たな解釈を当てはめて見ると、より論理的に理解することが可能である。つまり、現在見られる鼻は、石彫のリサイクルによって消されてしまった幅広で低い鼻、つまり、オルメカ文化の石彫において超自然的存在を表現する際に常に用いられる鼻が削り取られ、小鼻の部分の深く彫り込まれた刻線が残っていると見なすことが可能である。この解釈は、サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号において、左右の鼻孔の間の部分が表現されていないということの説明にもつながる。つまり本来は、その他の多くのオルメカ文化の石彫にみられるように、幅広で低い鼻が表現されていたとしたら、左右の鼻孔の間の部分は、より前面に突出していたはずであり、石彫のリサイクルの際に平面にするためにその部分も削り取られてしまったと考えることができるからである。

さらに、他の石彫に表現される鼻や口の形態と

比較すると原始的な芸術様式に見えることから、この石彫はオルメカ文化の石彫の中でも原初的な石彫の一つであると考えられている（Coe y Diehl 1980: 351, de la Fuente 1984: 95-96）。確かに、層位的な情報からもこの石彫がオルメカ文化の石彫の中でも初期のものに属すことは明らかである。しかしながら、この石彫はリサイクルを受けているという事実もあり、上述したような過程でリサイクルが行われているとしたら、その原初的な顔の表現を製作時期の判断基準とすることはできない。

一方で、サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号の口の形に関して、そのリサイクル前の形態は巨石人頭像の口のように奥深く彫刻された通常の人間の口の形であったと見ることも可能であるかもしれない（図 9）。つまり、両頬に残る半月形のエクボは人間の口許の痕跡であり、U 字形の口は上唇の表現の痕跡と見ることもできるかもしれない。だが、巨石人頭像などにみられる通常の人間の口許の表現は完全な円形を呈する。さらに、上唇と下唇の境界は、若干の波形を呈するがサン・ロレンソ遺跡石彫 41 号に見られるような完全な U 字形を呈することはない。

さらに付け加えると、非常に写実的な描写をするオルメカ文化の彫刻家たちが、このような形態、そして顔全体における比率において非常に不均衡な大きさの口やエクボを彫刻したとは考え難い。したがって、上述のような様々な理由から、サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号の口の形態はこれまでに考えられていたようなものではないと見なす方が、より論理的な解釈になると考えられる。

4. まとめ

サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号はその発見以来 40 年近くの間、笑った顔が描写されていると考えられてきた。このような表情の石彫がオルメカ文化の他の石彫には全く見られないにも関わらずである。オルメカ文化の石彫は、巨石人頭像など他のメソアメリカ古代文化には見られないような独特な遺物が多いためか、１点１点を詳細に観察した報告が少なく、調査者の印象をもとに解釈されるケースが多かったのかもしれない。サン・ロレンソ遺跡石彫 41 号も、多種多様で独特な特徴をもつ石彫を遺したオルメカ文化の中では、笑った顔という異質さは緩和されてしまっていたのかもしれない。しかし、同様な特徴を備える他のオルメカ文化の石彫との比較を行ったり、石彫自身を詳細に観察した結果、その表情に関する解釈の代替案を示すことが可能であることが今回の調査で判明した。

オルメカ文化の図像解釈に対する訂正はこれまでにも行われている。その顕著な例は、スターリングによって提出されたオルメカ文化を担った人たちの起源神話に関するものである。スターリングはサン・ロレンソ遺跡の２次センターであるロマ・デル・サポーテ遺跡やテノチティトラン遺跡から出土した石彫のモチーフをもとに、人間の女性とジャガー神との間からオルメカ文化を担った人々が生まれたという神話を復元した（Stirling 1955: 8）。しかし、これは後に同様のモチーフをもつ石彫を詳細に観察したメデジン・セニルによって戦闘の際の祝勝のポーズを表現している可能性が高いことが指摘された（Medellín Zenil 1960: 95）。

今回ここに提示した石彫解釈に関する代替案では、石彫 41 号は再彫刻の過程にあり、石彫のリサイクルに伴う削り取りの結果、今日見られるような状態になっていると考えた。しかし、この石彫が完成品ではないという事実を考慮すれば、現在見られる状態は完成に向けた荒削り、つまり顔

を彫刻する際の目安となるものが彫刻された段階とみなすことも可能である。しかし、いずれの過程にあるにしても本来あるべき顔の表現が超自然的な存在を示す顔になるであろうということは、今回述べた様々な理由からほぼ確実である。

今後は、さらに議論を深めるためにサン・ロレンソ遺跡石彫 41 号をはじめ、同様の特徴をもつ石彫がオルメカ文化の中でどのような位置づけが与えられていたのかを考察していく必要がある。

【謝辞】

今回の調査を行うにあたって、メキシコ国立自治大学人類学研究所のアン・サイファース博士から多大なるご助力とご助言を賜ったことを記して感謝の意をあらわしたい。

註

1) 個人所有や盗掘などによって消息が不明になっているものを含めれば、オルメカ文化の石彫の総数はさらに増えると予想される。
2) 現在遺跡地表面で観察される土製のマウンド群は、古典期以降に属するものでオルメカ文化とは直接の関係はないと考えられる（Coe and Diehl 1980 Vol.1）。先古典期のオルメカ文化の建造物である「赤の宮殿」は現在の地表面から約３m 下で検出されている（Cyphers ed. 1997: 104）。
3) オルメカ文化ではこの「超自然的な存在」のことを半人半ジャガー的特徴を備える「ジャガー人間」として扱うことが一般的である。また、この「超自然的な存在」の口に関して、人工物のマスクである可能性も指摘されている（González Lauck 1991）。
4) ラ・ベンタ遺跡の石彫８号はＬ字形の目が表現されているにもかかわらず、牙を伴う口は表現されていない。しかし、普通の人間が彫刻されたその他の石彫と比較した場合、異常に厚い唇が表現されており、その口の形は通常の人間の口というよりも超自然的存在の口に近い。

引用文献

Coe, M. and R. A. Diehl

1980 The Land Of Olmec. 2 Vols. University of Texas Press, Austin and London

Cyphers, A.

1994 San Lorenzo Tenochtitlán. In Los olmecas en mesoamérica. edited by Clark, J. E. pp.43-67. Citibank and El Equibrista, México, D.F.

1999 From Stone to Symbols: Olmec Art in Social Context at San Lorenzo Tenochtitlán. Social Patterns in Pre-Classic Mesoamerica. edited by Grove, D. C. and R. Joyce: 155-181. Washington, D.C.

2004a Escultura olmeca de San Lorenzo Tenochtitlán. Universida Nacional Autónoma de México, México, D.F.

2004b Escultura monumental olmeca: temas y contextos. In Acercarse y mirar. Homenaje a Beatriz de la Fuente. edited by Uriarte, M. T. and L.Staines Cicero. pp.51-73. Universida Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Cyphers, A. (Editor)

1997 Pblación, subsistencia y medio ambiente en San Lorenzo Tenochtitlán. Universida Nacional Autónoma de México, México, D.F.

De La Fuente, B.

1973 Escultura monumental olmeca: Catálogo. Universida Nacional Autónoma de México, México, D.F.

1984 Los hombres de piedra: Escultura Olmeca. 2nd edition. (1977). Universida Nacional Autónoma de México, México, D.F.

González Lauck, R. B.

1991 Alugunas consideraciones sobre los monumentos 75 y 80 de La Venta, Tabasco. In Anales del Insitito de Investigaciones Estéticasa. Núm.62. pp.163-174.

2000 La zona del Golfo en el Preclásico: la etapa olmeca. In Historia Antigua de México. vol.1, edited by López Luján, R. and Manzanilla, L.pp.363-406. Instituto Nacional de Antropología e Historia, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Joralemon, P. D.

1971 A Study of Olmec Iconography. Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology. No.7. Washington, D.C.

Medellín Zenil, A.

1960 Monilitos inéditos olmecas. In La Palabra y el Hombre. Núm16. pp.75-97.

Porter, J. B.

1989 Olmec Colossal Heads as Recarved Thrones : 'Mutilation,' Revolution and Recarving. In Res : Anthropology and Aesthetics 17-18. pp.91-97.

1992 "Estelas Celtiformes": Un nuevo tipo de estructura olemca y sus implicaciones para los epigrafistas. In Arqueología, 2nd series, Núm.8. pp.3-13.

Stirling, M. W.

1955 Stone Monuments of the Rio Chiquito. Bureau of American Ethnology Bulletin 157. pp. 1-23. Washington, D.C.

Symonds, S., A. Cyphers and R. Lunagómez

2002 Asentamiento prehispánico en San Lorenzo Tenochtitlán. Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Taube, K.

2004 Olmec Art at Dumbarton Oaks. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.